

表 6 授乳中の薬物使用に関する勧告（文献¹⁰⁾より引用改変）

分類	授乳可能	解説
Compatible	授乳可能	臨床問題となるほどの母乳移行性はないか、授乳中に使用しても児に毒性を示さない。
Hold Breast Feeding	授乳延期を推奨	母乳への移行が認められるが、母体の治療が優先される。母体の治療が終了し、薬物が母乳から除去されるか低濃度になるまで、授乳を差し控えるべきである。
No (Limited) Human Data - Probably Compatible	授乳可能と推測	ヒトでの使用経験はないか、非常に限られる。入手可能なデータから、児への重大なリスクはないと判断される。
No (Limited) Human Data - Potential Toxicity	潜在的リスク（児）	ヒトでの使用経験はないか、非常に限られる。薬物の特性から児に重大なリスクが及ぶ可能性がある。授乳は推奨されない。
No (Limited) Human Data - Potential Toxicity (Mother)	潜在的リスク（母体）	ヒトでの使用経験はないか、非常に限られる。薬物の特性から母体に重大なリスクが及ぶ可能性がある。授乳は推奨されない。
Contraindicated	授乳禁忌	ヒトでの使用経験や薬物の特性から、児に危険な毒性が及ぶ可能性がある。あるいは、この薬物を必要とする母体の病状から、授乳は禁忌となる。

表 7 授乳中の女性に対する薬物療法の指針（文献¹²⁾より引用改変）

1	薬物は本当に必要か否か。母親の担当医と小児科医が相談して、治療法を選択することが有用である。
2	最も安全な薬物を選択すべきである。（例：鎮痛剤では、アスピリンよりもアセトアミノフェンを選択する）
3	乳児に対するリスクの可能性のある薬物を使用する場合は、児の血中薬物濃度の測定を考慮する。
4	授乳直後や、児が長時間眠る直前などに、母親に服用させることにより、児への薬物の曝露を最小限にすることが可能である。

表 8 授乳中の女性の薬物使用による乳児への影響（文献¹²⁾より引用改変）

Table	分類	解説
1	細胞毒性があり、乳児の細胞代謝を阻害する可能性のある薬物	抗腫瘍薬など
2	乱用性があり、乳児への有害作用が報告されている薬物	乱用薬物
3	一時的に授乳の中止を必要とする放射性医薬品	核医学検査薬
4	乳児への影響は不明だが、懸念のある薬物	医薬品（慎重投与）
5	数例の乳児への重大な影響の報告があり、母親に注意を喚起する必要がある薬物	医薬品（慎重投与）
6	通常は乳児への使用が可能とされる薬物	医薬品（投与可能）
7	食物、環境物質	

血栓薬）について、以下に解説する。本章以外にも、「5. 妊娠と不整脈」、「7. 妊娠高血圧症候群の特徴と管理」、「13. 機械弁と妊娠・出産」などを参照していただきたい。

薬物の実際の使用に際しては、薬物の母体への有効性と、胎児・新生児に対する危険性のバランスについて検討する必要がある。

薬物療法の各論における一覧表の記載について、以下に解説する。

妊娠中の投薬に関する FDA 勧告（薬物胎児危険度分類）、授乳に関する AAP の勧告、「Drugs in Pregnancy and Lactation (9 版)」の妊娠と授乳に関する勧告、添付文書情報を併記した。また、薬物使用の検討に役立つよう、筆者自身の「評価」も加えた。

AAP の授乳に関する勧告では、Table 4・5 を「慎重」

（慎重投与）、Table 6 を「可能」（投与可能）と分類した。

添付文書情報は、医療用医薬品の使用上の注意の記載要領」（薬発第 607 号）（図 1）の D（措置）の記載内容に対応して、「禁忌」（投与禁忌）、「慎重」（慎重投与）で分類した。（表 9）

筆者自身による「評価」では、「禁忌」（投与禁忌）、「慎重」（慎重投与）、「可能」（投与可能）の 3 通りの分類とした。「禁忌」は、期待される薬効と比較して、胎児リスク（催奇形性や胎児毒性、新生児毒性）の懸念の方が大きい薬物とした。「慎重」は、胎児や新生児のリスクはあるものの、投与方法（用量、使用経路、使用期間、使用時期など）に配慮することにより、胎児リスクを許容可能な程度に軽減可能な薬物とした。あるいは、臨床データが限られ、胎児・新生児のリスクが不明な薬物とした。

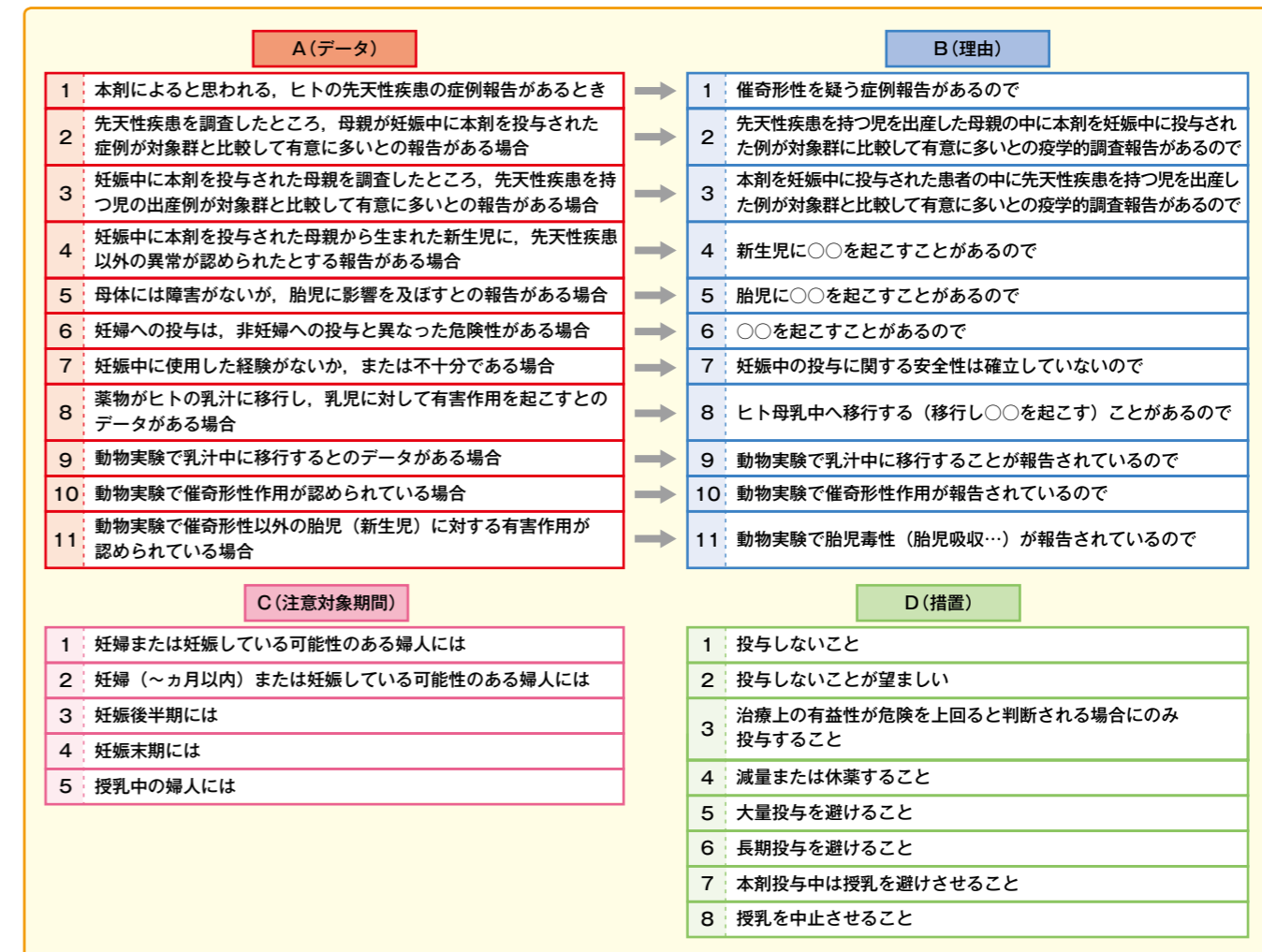


図 1 妊婦、産婦、授乳婦への投与に関する表現法（薬発第 607 号、医療用医薬品の使用上の注意の記載要項）

表 9 妊婦、産婦、授乳婦に関する添付文書情報と、本章の薬物一覧表の評価の対応表

D (措置)	妊娠期	授乳期
1 投与しないこと	禁忌	禁忌
2 投与しないことが望ましい	慎重	慎重
3 治療上の有益性が危険を上回ると判断される場合にのみ投与すること	慎重	慎重
4 減量又は休薬すること	慎重	慎重
5 大量投与を避けること	慎重	慎重
6 長期投与を避けること	慎重	慎重
7 本剤投与中は授乳を避けさせること		禁忌
8 授乳を中止させること		禁忌

妊娠中や授乳時の使用を禁忌とすべき心疾患治療薬

胎児毒性や催奇形性への懸念から、妊娠中の使用を禁忌とすべき（あるいは、とくに嚴重な注意を要する）薬

物として、アンジオテンシン変換酵素（ACE）阻害薬、アンジオテンシン II 受容体拮抗薬（ARB）、エンドセリン受容体拮抗薬がある。また、新生児への毒性の懸念から、授乳時の使用を禁忌とすべき（あるいは、使用中の授乳を中止すべき）薬物として、アミオダロンがある。詳細は薬物の各論をご参照いただきたい。

妊娠中の抗心不全薬

抗心不全治療を目的とした妊婦への使用報告が少ないため、主に抗不整脈薬あるいは降圧薬として使用した際の注意点を記載する（表 10）。

ジギタリス

ジゴキシンは胎盤通過性が良好であり、胎児の頻脈性不整脈の治療にも使用されることがある。催奇形性の報